

不況下における日系ブラジル人の滞日意識の変化について —日系ブラジル人へのインタビューを通して—

福元 健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 23 年 12 月 22 日受理)

Awareness and Future Prospects among Japanese-Brazilians after the Global Economic Crisis

Takeshi FUKUMOTO

(*Department of Living and Welfare, Nishikyushu University Junior Collage*)

(Accepted December 22, 2011)

Abstract

This study aimed to investigate the influences of global recession among Japanese-Brazilians, focusing on how their future plan has changed after the global recession. It has been considered that Japanese-Brazilians have extended their stay in Japan though majority of them considers themselves as a migrant worker, resulting in their settlement in Japan. However, the influence of the global economic crisis brought their return rush to their home country. Interview survey was conducted in order to reveal how Japanese-Brazilians see their future. The result suggests that Japanese-Brazilians came to consider their plan for future more seriously after the global economic crisis, and started to prepare for return or longer stay in Japan.

Key word : Japanese-Brazilian 日系ブラジル人
Settlement 定住化

1. 問題と目的

本研究の目的は不況下における日系ブラジル人の生活の再建と日本での定住に関する意識の調査をすることである。入国ビザの緩和により日系ブラジル人の来日が増加した90年代初頭以来、かれらは主に製造業に短期労働者として来日し、生活を始めた。日本人が避けていた3K（きつい、汚い、危険）の仕事を日系ブラジル人やその他の移民短期労働者が従事することによって、日本の製造業の労働人口は維持されてきた。当時は労働者が恒常的に不足していたため、日系ブラジル人は比較的簡単に職を見つけることができていた。日系ブラジル人の人口の増加とともに、彼らが集住する地域ではエスニックコミュニティが形成され、ブラジル系の食料品店やレストランなどができていった。当初、日系ブラジル人は短期労働者としてみなされていたが、人口の増加やコミュニティの形成とともに従事する職種も増え、滞在の長期化が進んだ。

日系ブラジル人の定住に関して、先行調査によると日本在住のブラジル人のなかで日本での永住を目指す人は少なく、ブラジルへの帰国する意思が強いことが指摘されている（小内・酒井ら2001）。一方で、梶田ら（2005）は在日ブラジル人社会を「見えない定住化」と称し、帰国と来日を繰り返す日系ブラジル人や日本での滞在を延長し続ける日系ブラジル人が結果としての定住化に直結していると述べている。

しかし、2008年のリーマン・ショックを発端とする日本の景気の低迷は定住化が進む日系ブラジル人社会に大きな打撃を与えた。日系ブラジル人の大多数が従事する製造業も大きな被害を受けた。「派遣切り」という言葉がメディアの注目を集めたが、日系ブラジル人は外国人であることや日本人雇用者から短期労働移民とみなされていることなどから「派遣切り」の第一のターゲットとなった。その結果、多くのブラジル人が帰国を余儀なくされ、日系ブラジル人コミュニティの崩壊につながった。

30万人を超えていた日本におけるブラジル人人口は、2008年と2009年のブラジル人登録者数を単純に比較しても約5万人減少し、2010年はさらに約3万人の減少となっている（法務省の登録外国人統計表による）。定住化が進んでいると叫ばれながらこのような大量の帰国者を生み出したことは世界的にみても異例といえる。今後の日本とブラジルの情勢によってはさらなる帰国ラッシュを生み出す可能性も否定できない。

本研究ではリーマン・ショック後に日本での滞在にどのような変化があったか、また帰国ラッシュが続く家族や友人が帰国しているという状況のなかでどのように将来を見据えているかをインタビュー調査を通じて明らか

にする。今回のインタビュー調査では、単身で来日している独身者2名と単身で日本に在住している既婚者2名、家族（子ども）と一緒に日本に滞在している2名という背景が異なる6名に協力を依頼した。

2. 方法

調査期間：2010年8月～2010年11月

調査方法：フィールドワークを通じて知り合った日系ブラジル人6名に調査内容を説明し、協力の承諾を得た。この6名に対して半構造化インタビューを行う。インタビューでは質問項目を中心としながらも自由に語ってもらった。インタビューは一人あたり50分～1時間30分であった。対象者の了解を得て、インタビュー内容を録音機器を用いて記録し、作成した逐語録をもとに、文脈ごとにその内容を要約した。インタビューは主に日本語で行ったが、日本語を話せない人にはポルトガル語で通訳してくれる日系ブラジル人に協力を依頼してインタビューを行った。インタビューは調査協力者の家や喫茶店などで実施した。面接データおよびフィールドノートに基づき、個々の事例について出来事や気持ちの変化を整理し、質的な分析を行った。

調査協力者：協力者の人数は6名（うち男性4名、女性2名）で、協力者の平均年齢は41.1歳であった。協力者の滞在年数の平均は15.6年だった。

6名の協力者のうち3名がパートタイムで働いており、2名が正社員であった。正社員として働いている人の仕事は派遣会社と一般企業である。1名が調査時無職であった。調査協力者の婚姻状況については、2名（A、B）が独身、2名が既婚で単身で日本に在住（C、D）、そして2名が既婚・子どもと同居（両親はブラジル）、という状況であった。調査協力者の日本語能力について、5段階に分けて自己評価をしてもらった。5：日本語の読み書きができる、4：ある程度日本語の読み書きができる、3：日常会話レベル、2：あいさつ程度、1：まったく話せない。事例BとDへのインタビューは、同僚で日本語を話すブラジル人に協力を依頼し、通訳してもらった。調査時の時点での将来住む予定の国を選んでもらった（日本で生活する、あるいはブラジルに帰る）。

表1 調査協力者一覧

事例	年齢	性別	日本での滞在歴	世代(日系何世)	日本語能力	将来
A	30代	男性	10年	3	4	ブラジル
B	30代	女性	14年	3	2	ブラジル
C	40代	男性	15年	2	3	ブラジル
D	50代	男性	15年	2	2	ブラジル
E	40代	女性	18年	3	5	日本
F	40代	男性	22年	2	5	日本

3. 結果と考察

＜リーマン・ショック以前の調査協力者の状況＞

インタビュー協力者のほとんどは来日当初は日本での生活を数年と考えていたが、日本とブラジルの給料の違いや子どもの教育などの理由により滞在期間を延ばしてきた。リーマン・ショック以前は仕事を変えるのは難しいことではなかったため、よりよい給料を求めて転居して別の地域で働いたりしていた。仕事を探したり転職する際には、友人・知人を通じて情報を得たり、派遣会社からの仕事の斡旋によって仕事を見つけたりしていた。滞在が長期化するにつれて、日本国内での移動は少なくなり、特定の地域で定住化していった。

リーマン・ショックによる不況の影響で日本での永住の希望の有無に関係なく協力者の親や兄弟、友人などが帰国している。日系ブラジル人の日本での滞在は長期化し定住化が進んでいるといわれている一方で帰国の意思を持っている日系ブラジル人は少ない。彼らの多くは日本に仕事があり、それを続ける結果として日本での滞在を延長し続けてきたと考えられている。

＜リーマン・ショック以降の調査協力者の

状況と定住意識＞

＜単身・独身のケース＞

事例1

回答者Aは10年前に来日した。来日当初は2～3年働いたあとブラジルへ帰国する予定であったが、日本での仕事を続けた。日本での滞在中は同じ地域に住み続け、地域の人とのかかわりも増えたという。しかし、2年後にブラジルに帰国することを決めた。これまでに4回転職したことがあり、日本の小学校に勤務した経験もある。日本語能力に問題はなく、日系ブラジル人の友人も多いため、社会関係資本には恵まれているが、リーマンショック後に職を失ってから帰国を考え始めた。一旦仕事を失ってからも仕事を見つけることはできたようだが、以前よりも給料や待遇がよくないという。外国人であるからという理由で仕事の面接を断られたこともある。失業

中にブラジルへ帰国することを考えたが、仕事を見つけたために滞在の延長を決めた。自分の周りの友人と将来のことを話すとほとんどの人が帰国を考えているという。

インタビュアー：不況になる前と後で職場にどんな変化がありましたか？

回答者A：たとえば前は・・・免許、溶接は免許なくても誰かが教えてくれた。でも不況の後には免許がいるとか、日本語も必要とか、運転免許もいる。自分のアパートもいる。車もいる。なにかもいる。前はリフトの免許とかそれだけ。今はぜんぜん違うね。

インタビュアー：仕事の時間は短くなりましたか？

回答者A：それはあります・ちょっと少なくなった。私の場合は時間が増えたから勉強したね。

(中略)

インタビュアー：なぜブラジルに帰ることを決めたのですか？

回答者A：日本でいっぱい働いた。疲れたから。今まで10年日本で働いたね。その一、来年帰国して、今後の10年を、なんか大学は行って卒業して、好きな仕事をはじめ。そうするつもり。

(中略)

回答者A：仕事が少なくなるとか給料も減らすとかだと、ブラジルに帰るほうがいい。それは私もみんな(友だち)も同じ考え。

考察

Aは不況の影響で失業するまでは特に将来のことを考えていなかったと言及した。日本で仕事を見つけて生活することはこれまでは難しいことではなかったが、リーマン・ショック後に失業といまだかつてない就職の難しさを経験し、将来を不安視し始めた。今のような状況が続くと日本で生活していくことが難しいと考えていることを言及している。Aはインタビュー中に何度も日本での生活に疲れた、ということ述べた。また、ブラジルに帰国したら日本にまた戻ってきて働くことはないと言及している。いかに失業してから大変な思いをしたかがわかる。現在は仕事の時間が短いため、空いた時間に勉強することを言及している。勉強したことをブラジルに帰国して生かしていくとインタビューで述べていた。失業経験によって自身の将来を考えるようになったために帰国の準備を始めたと考えられる。

事例2

回答者B(30代)は1998年に叔父と来日。その後、両親と兄弟が来日し、一緒に生活するが2008年に全員失業し、家族はブラジルに帰国した。日本語を話すことはできないが、これまでは知人や派遣会社を頼りにして

仕事を探してきた。教会やイベントを通じて多くの友人ができたが、不況になってからはほとんどの友人が帰国した。そのため、仕事を紹介し合ったりすることが難しくなったという。失業してからはエステの勉強をして資格を取った。将来はブラジルへ帰って仕事を探すという。

インタビュアー：いつごろからエステの勉強を始めたんですか？

回答者B：1年ちょっと前から。不景気になってから勉強しました。その前までは関心なかったです。工場で働けばいいと思ってました。

(中略)

インタビュアー：なぜ帰国を考えるようになったのですか？

回答者B：最初に来たときは出稼ぎという意味で来たんですね。日本にきて、いろいろ生活になれて、家族も来て、みんな仕事で来て、生活も安定していったときに日本に残ることも考えていたんです。家を購入して、そこまで考えていたんです。でも不景気になってきてから事情が変わって、仕事もなくて、両親も年いってたから、もう帰る選択しかなかった。弟の大学のこともあったんで両親も帰って、で私だけ残って。まあ帰っちゃったもんで、もう私も帰ることを考えているんですね。あのときのまま家族がいればずっと日本に残るって考えたかもしれない。

考察

Bはリーマン・ショックによって仕事を失ったので勉強を始めたことを言及している。リーマン・ショック以前は日系ブラジル人のネットワークを介して仕事を見つけることができていたが、そのネットワークが友人の帰国により崩壊したため、仕事を見つけることは難しいと考えている。Bは日本での滞在が12年と長く、日本での生活に満足していたが、家族と友人を失ったことにより自分も帰国することを決めた。

リーマン・ショックによる不況により大量の帰国者を生んだことで、日本に滞在し続けることができた日系ブラジル人も将来設計を再考するようになったことが推察される。本来の出稼ぎ目的で来日した人にとってはその意識を取り戻すきっかけになったとも推察できる。

事例1と2に共通していることは両者とも2008年以降に家族や友人がブラジルに帰国したため自分も帰国しようと考えていることである。また、両者とも失業を経験したあとに将来のことを考え、帰国の準備(勉強)を始めた。インタビュー協力者たちによると、不況の影響で失業をした後に資格をとるための勉強を始めた、日本語の勉強を始めた人は多いという。これまでは仕事を簡単に見つけることができていた日系ブラジル人であったが、不況下ではこれまで要求されることがな

かったスキル、特に日本語能力が求められると感じているという。このような状況にあるため、彼らの多くは日本にこのまま滞在するか、帰国するかという選択について再考している。また日本語を話せない人たちは勉強をするか帰国をするかという選択を迫られている。

<単身・既婚者のケース>

事例3

回答者C(40代)は1989年に来日し、一旦ブラジルに帰国したが事業に失敗し、2004年に再来日した。不況の影響で失業し、10か月後に再就職を果たした。一回目の来日では家族が一緒だったが、現在は家族をブラジルに残して日本に一人で生活している。日本での永住を希望していたが、将来的に日本に住み続けることは難しいと感じている。

インタビュアー：今後も日本で仕事を続けていきたいですか？

回答者C：ちょっと難しいね。今はもう、ハローワークに行っても、「ああブラジル人」って言われるね。それで、「ブラジル人、漢字読めるか。」「読めないと難しいね」って会社の人は言うね。漢字読めないと断られるね。ハローワークにずっと行ってたけど。電話したら、「日本語はどうだ?」「日本語は多分40%か50%はできる」っていう。そしたら「漢字はどうだ?」「漢字は読めないね」「あーそう、そしたら難しいね」って言うね。まあ仕事あまりないからね。仕事はあるけど、だいたい日本人を使ってるね。仕事があるときはね、そんなにあんまり言わないもんね。日本語の能力ってとか。でも仕事が少ないから、その絞り込まないといけないから。日本人も仕事少ないし。

(中略)

インタビュアー：将来は日本に住み続けますか、それとも帰国しますか？

回答者C：俺はもう日本が一番。もう言ってもらえないけど。ブラジルに帰らないと奥さんが帰って来いって。

事例4

回答者D：50代。妹と一緒に1994年に来日。妹はすでに帰国している。ブラジルに妻子がいる。日本語で会話することはできない。

インタビュアー：将来は日本に住み続けたいと考えていますか？

回答者D：言葉の問題があるので・・・、あと年の問題もあるから。もう私が決断したのは、仕事を変えないほうがいい。もしも景気が悪くなって年になって仕事ができないようになったらブラジルに帰るつもりです。ブラジル人がたくさんいたときは自営業も考えていたけど、不況になったからその考えがなくなりました。私ははっ

きりいったら、もし年金とか社会保険も入っていて、将来的に安全だと分かっていたら日本にいたかったけど、そういうのに入っていないから。日本ではブラジルで起る犯罪が普通に起こらないから住むにはいいところ。でもいずれは仕事もできないようになるから帰るしかないね。

考察

CとDの両者は長年日本で働き続けたため、日本語での会話に問題はないが、読み書きを含めた日本語能力がないと今後仕事を探すことは難しいと示唆している。「派遣切り」の際に日本語能力や年齢が解雇の対象になったということを示すデータはないが、日系ブラジル人や派遣会社の雇用担当者の間では日本語ができないと仕事に就くことができないと認識されている。日本語教室を主催する人の話によると、「派遣切り」で失業した人の数が増え、日本語教室に参加する人が急増したという。この背景は、これまで日本語を必要としない仕事に就くことができていたリーマン・ショック以前とは違い、就職の際に日本語能力が必要になったことにある。リーマン・ショック後は派遣会社が提供する仕事の数が減ったため、彼らは自分で仕事を探すことを始めた。派遣会社や友人による仕事の紹介がなくなった日系ブラジル人は日本人と同様にハローワークや求人誌を利用して仕事を探すようになったが、そこでは日本語能力を要求されるため、日本語の勉強を始める。しかし、日本語の勉強とはいえ、求人先が求める日本語能力と製造業で働き、日本語能力を必要としない日系ブラジル人労働者の日本語のレベルには大きな差があり、短期間の勉強だけでクリアできる問題ではない。さらに、これについても日系ブラジル人の間で認識されていることであるが、若い人のほうが雇用されやすいと考えられているため、CやDのような40代以上で日本語を話せない人たちは日本でこの先働き、住み続けることが難しいと諦めていると考えられる。

CやDのように日本に長く滞在していた人たちのなかでは、家族がブラジルにいて定期的にブラジルに帰国するものの、日本に永住したいという希望を持つ人は少なくない。日本での定住を実現するには仕事に就き続けなれないといけないと考えるが、不況の影響で刺し認識させられる言葉や雇用環境の違いから永住をあきらめる場合もある。しかし、この先の状況によっては、かれらの雇用環境が改善され、再び日本での滞在の延長を考える可能性がある。

<子どもを持つ親のケース>

事例5

インタビュアー：将来は日本とブラジルのどちらに住

むと考えていますか？

回答者E：ブラジルに帰りたいけど帰れないね。何か向こうのほうがよくなっているみたいね。いろいろブラジルは伸びるって。日本の会社もブラジルにどんどんできているし。帰りたいけど子供のためにはだめ。子供が大学に卒業して、そしたら帰ろうかなって。

インタビュアー：過去にブラジルに帰国しようとしたことはありましたか？

回答者E：ありましたけど、タイミングを見逃すと・・もう見逃しているんです。だから私はずっと、日本はもう大好き。暮らしやすいし。でも子供の教育とかをいろいろ考えると、まだ子供が小さかったころに帰りたいかなって。両親が向こうだし、親戚も、私の親戚も全部むこうなので。

事例6

回答者F：うーん、僕は日本もちろん好きですけど、やっぱり気持ちとしては帰りたいんです。でも上の子供二人が日本語しかできないので・・・帰れないと思うけど。遊びとか、両親まだいるので、例えば5年に一回帰国して会いに行くつもり、その予定で。

(中略)

なんというか、帰れない現実になるんです。長年国から離れて、もう向こうの現状も変わってるし。で、本人も向こうに(ブラジル)帰ったときの立場はどうなってるだろう。もう年取ってるし仕事ないし。いろんな問題がおきてくる。日本でずっと育ててブラジル初めていったときは若くても・・入れないでしょ、社会に。やっぱり、何人かそこに合わせて入れる人もいないけど・・それも一つの問題ですよ。将来の。

(中略)

回答者F：日本で教育された子供たちは若者は日本に残りたいっていうのがほんとうですね。無理やり帰って・・また問題になってまた戻ってくる。そういう話は聞きますからね。まあ・・本人が何人がわからなくなるんです。自分の国籍、日本人なのかブラジル人なのかよくわからなくなるんです。であの・・小さいころから日本にきてこっちで教育受けて、もう・・高校・大学まで行って、だけど外国人ですよ。戸籍上は。まだに日本籍持っていない。

インタビュアー：景気が悪くなってこの先の予定が変わりましたか？

回答者F：そうですね。今までは多く仕事して多く稼ぐことが当たり前だったんですね。家庭の経済の生計を図るときにはやっぱり収入ですよ、で、その収入が当たりの収入じゃなかったんですよ。ちょっと以外だったんですよ。その分もらってたし、そのぶん仕事してたもんですから。それに慣れてたんですね。それが

景気悪くなって、仕事も減ってきて残業も減ってくると収入も減ってくるでしょ。でもそれが当たり前になってたから。で、それで生計を立ててたから。実際はもうほんとうにレベルを下げなきゃいけないでしょ。それになれるかなれないか。それだったら国に帰るか、というのがあったんですね。だから不況になってから本人たちは自分たちの立場を分かってきたんですね。やっぱり日本にきて日本人とはちょっと違うところがここにある。

考 察

回答者EとFはともに日本での生活が長く、日本語の読み書きもネイティブレベルである。また、共に正社員であり日本での生活は他の日系ブラジル人と比べると安定しているといえる。だからといって将来日本で永住したいという気持ちをもっているというわけではない。回答者EとFの場合も2008年以前は両親や兄弟が日本にいたが、彼らは失業してブラジルに帰国している。日本に住み続ける理由は子どものためであることを言及している。回答者EやFのように子どもの日本での教育を優先するために日本で滞在を続けるというケースは多いと推測されるが実際はそうではないという。梶田ら(2005)によると子どもの教育がブラジル人の滞日意識につながる比率は高くないという。子どもはあくまで親の生産活動に左右され、その犠牲者になりやすいとみている。ポルトガル語教室を営むブラジル人の話によると、2008年以降ポルトガル語の勉強を子どもに始めさせる親が急増したという。同教室で日本語も教えているというが、日本語教室に通う子供の数に増減はないが、ポルトガル語教室は常に満席になると言及した。このように日系ブラジル人が集住する地域では、親が日本語を勉強し始め、子がポルトガル語の勉強を始めるという現象が起こっている。親は生産活動を維持していくために日本語を勉強し、その一方で子どもには自分の仕事がうまくいかなかったときのことを考え、どちらに転んでもいいように準備させるということである。2008年より前の、就職に困ることがなかった時期にはこのように子どもに対して将来のための準備をさせるということはほとんどなかったことであろう。そういった意味でも、リーマン・ショックの影響は帰国する意思を持ちながら日本での滞在を延長し続けてきた親に対して、具体的な計画を想起させるきっかけになったといえる。

4. ま と め

以上、6名の日系ブラジル人にインタビュー調査をして事例を紹介した。どの回答者にも共通していることは、友人や家族が失業して帰国し、日本での就職口が少なくなったことから、自分の将来について真剣に考え始めた

という点である。その点については、彼らのなかで日本に来ることになった本来の目的に立ち返り、帰国を意識し始めるようになったということが推測される。リーマン・ショックが起こるまではこのような大きな不況の波を経験したことがなかった日系ブラジル人にとって「派遣切り」や家族や友人の大量帰国は来日以来一番大きな事件だったといえる。これまでの日本での滞在を延長し続ける結果としての定住化の流れがストップしたといっても過言ではない。しかし、その一方で今後の経済の状況によっては、帰国したブラジル人の再来日も考えられる。いずれの場合にせよ、定住や帰国を考慮したうえで、日系ブラジル人コミュニティが日本で維持していくための政策が必要になるであろう。

参考文献

- 樋口直人, 2010, 「経済危機と在日日系南米人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622号.
- 梶田孝道、丹野清人、樋口直人, 2005, 「顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク」名古屋大学出版会.
- Lin, N., (2001), *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, New York: Cambridge University Press.
- 駒井洋 1995, 「定住化する外国人」明石書店
- 小内透、酒井恵真、2001, 「日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として」お茶の水書房
- Castles, S. and Miller, M. (1993) *The Age of Migration: International Population Movements in Modern World*, London: Macmillan